くらしのたしかめについて　　11月の参観から、考えさせられたこと

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校　長

〇　板書について

　　・ねらいを持って板書することの大切さ

　　　先生の最近の板書を見て思いました。子供の視点に立って話を聞こうとしている。第一発言者の発言を図や絵、端的な言葉を使った板書となっている。また詳しく聞き足りないことを敢えて先生は聞くことなく、板書に空間を設けることで、聞き手の子供たちが聞くポイントのヒントとなっている。板書とは、理解を助けること、授業の流れを作るヒントを与える役割を担っていることだと思いました。

　〇　子供への応答について

　　・「応答的保育」

「応答的保育」という研究がある。子供の動きや言葉をどのように捉え、どのよう反応するか、そのことで子供がどう育つのかを明らかにしていく研究である。このことは、学校における授業のみならず、先生が子供との日常的な会話にも生かすことができる研究と思われる。無論、本校のくらしのたしかめ、授業においても改めて大切であると思う。

先生が最初に、読書をどんな気持ちで臨んでいるのかを子供たちに問う。子供たちの多くは楽しいと感じており、なぜ楽しいのかを子供同士で考えていく流れとなっていた。後半になり、分厚く、文が細かく文章の量が多い本に対し、「めんどくさい」という気持ちを数人の子供たちが話してきた。そんな中、Hさんが「文が長くても、私はわくわくする気持ちが多い」と話した。さてここで先生はどのようにHさんの話を受け止め、応じるのかが問われる。担任の先生はここで、Hさんの詳細な言葉を逃がさない。皆さんはどうするのでしょうか。

「多いの？ちょっとめんどくさい気持ちあるの？」（Hさんうなずく）この発言と応答は少なくとも二つの効果が期待できる。

一つ目は、Hさん自身が自分の細かな気持ちを整理できたこと。

二つ目は、聴いていた子供たちが、自分の心の内をみつめる契機となったこと。自分には、めんどくさい気持ち、わくわくする気持ちがどれくらいあるのか、すべてめんどくさい気持ちなのか、そうでなければどんな気持ちなのかを問うことにつながるのである。

ここで先生が「わくわくなのね。みんなと違うんだ」と問い返していたらどうなっていただろうか。聞いていた子供たちは、Hさんとの分かりやすい気持ちの違いに注目することになる。そこでなぜわくわくするHさんなのかを知りたくなり、Hさんに「なぜわくわくなのか」を聞いていく流れとなっていくであろう。

上記のことはあくまで想像であるが、この何気ない応答で話合いの文脈は決まると考える。くらしのたしかめや授業ではそれぞれ先生のねらいがある。ただし、そのねらいに向けた応答（捉え、反応）の選択は瞬時である。